

審査員長講評 辻 弘

本年は平成の年号が 5 月には新年号に替わる時代の区切りの年となりました。時代が変わると社会現象や諸々の価値観も変わる気分になります。

ところで、宝塚市展も 62 回を迎え、創設時の昭和 30 年代とは驚くほどの社会の変化と共に、出品者数も作品の内容も変化し今日に至っています。第 62 回は 535 点の出品でした。一人一部門の制限が総数の減少に影響したとも考えられます。

洋画部門具象では身近な対象を丹念に描いた秀作が目にとまります。抽象では非対象の作品が会場を統一しています。彫刻・立体造形部門は毎年異なる前進的な作品を観ることができます。写真部門は多彩なモチーフを厳しい目で、映像化している。出品数も多く現代社会を反映しているようです。デザイン部門は安定した秀作が受賞しグラフィック・デザインが主となっています。書部門は篆刻を含め、漢字、かな書体に加え墨の濃淡と内容は多彩ですが会場は落ち着いて纏まっています。工芸部門は技法・材料が多彩な中で、伝統的な作品から電子画像と巾ひろい作品が見られます。日本画部門は限られた描写材料の中で雄大な世界を描きだし見応えを感じます。

各分門を概観し、創作意欲に熱意のある優れた作品は展示したいと願っていますが、展示スペースの関係もあって、大きさ制限や展示できない作品もあるのが現状です。

幸い、念願の文化・芸術センターの施設が完成予定です。今後、開催時期、期間、内容等募集要項が大幅に変更されることが予想されますのでご注意ください。新しい施設を市民の文化活動の場として大いに活用し、宝塚市の目指す「文化芸術の薫り高い宝塚の創造」の力になることを期待します。新しい時代の幕開けです！

洋画部門

藤井人史

■入賞作品についての講評■

【具象的なもの】

[市展賞] 渡部和枝さん「TUNAGU・II」まるで動いているかのように観る側をワクワクさせる。

[優秀賞] 藍家進さん「辺野古」現在置かれている沖縄県辺野古の状況を、過去未来観る者に訴えかける。

[優秀賞] 岸本務津子さん「夢」暖かい色あいにやや陰りを帯びた黒が、夢というものの儚さを感じさせる。

[鉄斎美術館賞] 荻野敦子さん「world」極めてリズムカルな動きがあり、やや暗い色調だが暗さを感じない。

[奨励賞] 芦田弘さん「インカ・マチュピチュ遺跡」湾曲した揺らいだ画面づくりだが、不思議とその場の空気感を強調している。

[奨励賞] 戸田麗子さん「静物」色の対比や調和が、観ていてとても心地良い。

【抽象的なもの】

[優秀賞] 阪本佳代子さん「糸と私」2次元と3次元の要素を組み合わせた、興味深い作風。

[優秀賞] 森實春美さん「pounding」素材への探求心が創り上げた秀作。

[奨励賞] 門脇済美さん「記憶のほitori」刹那な白模様の中に、見開きの黒がどこかホッとする。

[奨励賞] 河西厚子さん「47」一途な仕事で創り出した画面は、謎解きを忘れて思わず見入る。

[奨励賞] 高萩典子さん「からんどりえ」素材を通しての様々な黒と白、合間に見えるカラーがアクセント。

[奨励賞] 土井恵子さん「水底の記憶」海底に眠るかつての惨劇を再び繰り返してはならない。

[奨励賞] 福岡雅子さん「Imagination」抽象的であるが具象性をも伴った表現。渦巻きの向こうには何が見えるのか。

■全体的な総評■

前年度から出品方式が変わり、今年度から一人一部門一点のみとなった事もあり、今年は出品数が例年よりも少なく、作品も小ぶりなものが多かった。描き手の思いは千差万別だが、作品自体は、やや似通った印象を持ったものも多いように感じた。出品作の増加と、更なる意欲的、挑戦的な力作を期待します。

彫刻・立体造形部門

大野良平

■入賞作品についての講評■

[市展賞] 溝口由美さん「18」

幼児の落書きのような痕跡を残す板上にランダムに置かれた十数冊の洋書。開かれた頁に抜き取られた矩形。抜かれた形に寄せ木などが埋め込まれている。紙と木片とのコラボレーション。一見シュールだが、素材のもつ心地良い物語性を見事に引き出している。

[優秀賞] 兒玉健二さん「消失点」

幾何学的な数学的要素のなかに有機的な人間の頭部を組み込んだ木彫作品。板と原木との構成。多少粗削りではあるがバランスのとれた秀作となった。

[鉄斎美術館賞] 蛭川菜南さん「My creatures」

森の精霊あるいは太古の原生動物を想わせるユニークな動物たち。あまりにも個性的なキャラクターに鑑賞者もついニマリ微笑んでしまう。粘土制作から焼成までの仕事も丁寧で好感がもてる。

[奨励賞] 水野千秋さん「届かない塔、再び」

結束線と細い針金、2種類の線材による構成。空間を自由にドローイングする線の軌跡。それぞれの作品は単体であるが、複合させることでより線の魅力への相乗効果をもたらしている。

[佳作] Ms&Mr シュウさん「島影 4(大震災後も夜が明ける no.77)」

紡錘形の街の廃墟のような台座から伸びあがる塔のような形状。震災からの再生のメッセージだろうか。ダンボールを集積して削り剥がす。表面を燃焼させたかのような質感に魅力を感じた。

■全体的な総評■

今年度、会場スペースの都合上、作品規定の占有面積を狭めざるを得なくなりました。彫刻・立体造形は、空間を扱う芸術です。本来360度から鑑賞できる展示空間が望ましいのですが、現状は厳しく、主催者側も展示空間の改善に努めたいところです。さて、出品作品については、昨年に増して力作が揃いました。創造的観点から審査させていただきました。手工芸的な作品、創意工夫が足りない作品は、残念ながら選外となりました。また、デザイン的要素が強すぎて受賞を逃した作品もありました。デザイン、手工芸の域を超え、素材とどう向き合うか。創造性をどこまで引き出せるか。粗削りでも素材をとおして作者の想いが伝わる作品に魅力を感じます。次回、さらに期待したいと思います。

写真部門

吉野 晴朗

■入賞作品についての講評■

【市展賞】 土岐令子さん「熱視線」

広角で初夏に水遊びする親子をローアングルで捉えた作品で、空一杯の鯉のぼりをバックにして親子の緊張感とユーモアも感じるシャッターチャンスは逸品である。母の心配目線、子どものチャレンジ目線、幼児の不思議そうな目線もしっかり捉えられている。

【優秀賞】 岡田秀雄さん「朝ぼらけ」

山並みに包まれた湖の静寂な夜明けを捉えた作品で、モノーン仕上げも効果的で遠くの舟と人物と手前の羽を広げる鳥のシャッターチャンスも良く、小鳥の声に耳を傾けたくなる静かさを感じる。

【優秀賞】 古塚豊子さん「黄昏の光彩」

都会の夕暮れの多くの車が行き交う道路をフィルターも加えてファンタジックな表現にしたもので、無機質な都会の風景がどこことなく夢の中のメルヘン的な表情に仕上がっている。

【優秀賞】 堀内雅之さん「愁華」

花器と花だけのシンプルな画面だが、上質な絵画を思わせる作品でひととき目立っていた。抽象画のようなバックや全体に色彩を押さえて精神性も感じられ安らぎの中にも緊張感のある表現になっている。

【優秀賞】 山辺幸男さん「産寧坂」

京都の産寧坂の階段風景にデジタル加工で多くの観光客が押し寄せているイメージの作品で、周りの家並みのシャープさとぼかし重ねている人並みで現実のようで現実でないような不思議な仕上がりになっている。

【鉄斎美術館賞】 坂本安子さん「夢での再会」

子ども二人が壁のような大きなビニールに戯れている作品で、逆光が大きなビニールをまるで柔らかい風のように表現しており、子供の手がシルエットに浮かび上がりまるで童話の世界のようだ。

■全体的な総評■

写真部門は市展全体で応募が減ってきているなかで、僅かだが増えてきていて嬉しい審査となりました。デジタルの普及のなかフィルム撮影での出品もあり、頼もしさを感じました。作品群は身近なスナップから絵画のような作品までますます多彩で、身近に写真を楽しんでいることが伺えこれからの市展の広がり期待が持てました。

デザイン部門

相澤 孝司

■入賞作品についての講評■

第62回の市展賞は、昨年と同様で該当者なしとなった。したがって、優秀賞を3点選考し、奨励賞も2点とした。優秀賞の池上眞さん「2019 祭り CALENDAR」は、昨年と同じテーマであるが、祭りの情景をうまく表現している。安定したイラストのレベルは評価が高い。優秀賞の竹中豊秋さん「ポリネシア/人魚の島の花まつり」は、南国をイメージした明るい色彩と人魚のキャラクターも印象的である。優秀賞の早川博唯さん「サティ/ジムノペディー」は、ジムノペディーのシーンをオリジナルな視点でイラストにまとめており、完成度の高い作品である。鉄斎美術館賞の松本真之さん「森の隠れ処」は、森に隠れている、ユニークなキャラクターと細かな描写力が評価された。奨励賞の田村秀和さん「夢見るムーランゲート」と福岡なおさん「夏祭り」は、さらに上位の受賞を期待する。佳作2点は、次回に向けて頑張ってもらいたい。

■全体的な総評■

今回は初めての試みとして、(A)課題作品:「祭り」、(B):自由作品の募集を行った。受賞作品には、「祭り」をテーマとした作品が数点あり、今後の課題作品の展開が期待でき、デザイン部門の特徴になり得ると思った。しかし、市展賞に該当する作品がなかったこと、昨年に比べて出品点数が20点に減少したことは、大変残念である。優秀賞の3点は、いずれもイラストのレベルは高く、素晴らしい作品である。鉄斎美術館賞及び奨励賞も受賞作品として力作である。今回もデザイン部門は領域が広く、彫刻・絵画・工芸などの部門とあいまいな作品、技術不足で稚拙な表現の作品などがあり選外とした。また、イラストレーションなどの平面の作品が受賞・多数の入選となり、立体作品の入選は数点であった。デザイン部門では、様々な切り口が作品のコンセプトになる。次回に向けて、さらなる出品点数の増加と独創的・挑戦的な作品を期待する。

書部門

山下啓明

■入賞作品についての講評■

【市展賞】 末松年子さん 「仮名文字」

料紙と墨色の調和、仮名の優雅さが表現できて秀作です。

【優秀賞】 上原香雲さん 「若菜」

仮名独特の散らし形式で結句が強調され、良い。

【優秀賞】 玉田梨沙さん 「蘇東坡詩」

運筆の流れが自然でよしい。もう少し渴筆があれば作品が明るくなったでしょう。

■全体的な総評■

今年は、出品点数が減少、作品も小さいものが多く見られ淋しい結果となりました。

来年は、意欲ある作品を期待しております。

工芸部門

秋山文子 / 香川弘一

■入賞作品についての講評■

【優秀賞】 秋山千鶴さん 「フランス・パリ。セーヌ川より愛をこめて。」

伊勢形紙は本来型染用の型紙ですが、伝統工芸の技法を使い、パリセーヌ川クルーズを楽しんでいる風景を高度なカッティングナイフ技法で抜き画を製作されています。技術がしっかりして、細分まで確実な仕事をしています。

【優秀賞】 榎本善順さん 「渦潮」

練り込みの仕事は傷が入りやすいのですが、美しく仕上がっています。ブルーのグラデーションとシンプルな形で清涼感のある作品だと思いました。

【優秀賞】 菅沼秀行さん 「フムフム ヌクヌク アプアア」

魚をモチーフにしたステンドグラス作品は、ガラスを立体化しながら美しい色彩で生き生きと表現され、勢いがよく、泳ぐ姿もインパクトがあり目を引きまします。技・センスとも優れて高く評価しました。

【鉄斎美術館賞】 岸川博人さん 「信楽麻の葉文花器」

信楽焼きと麻の葉文のデザインのコラボレーションが力強く、存在感のある作品だと思いました。

【奨励賞】 嶋本博文さん 「黒釉線条紋鉢」

3年連続の受賞です。マスキングで抜いた土の色もきれいだと思います。

【奨励賞】 野入しをりさん 「奏」

幸せが夜空に響きわたる楽しそうな音楽隊の演奏が聞こえてきます。構図も色彩(タイル)の選び方もセンスも優れています。道路のタイル模様も美しいアートの要素とストーリー性が、ちょうどいいバランスです。

■全体的な総評■

日頃研鑽を積まれた工芸作品の数々を見せていただき、素材の多様さ・多種多様な技法があり、各領域にわたり優劣が付けづらく審査には時間がかかりました。その中で作者の表現意図と表現技法が合致している作品を高く評価しました。

自分の目で見(観)、感じ、考え、工夫し、素材を生かした素敵な作品を作りつづけて頂きたいと思います。

日本画部門

山市良子

■入賞作品についての講評■

[市展賞] 椎名淳子さん「渓谷の滝・夏」

大胆で重厚な構図とマチエールが、強い印象を与えます。黒を基調とした岩肌をつたう幾筋の滝の流れに生気を感じる力作です。

[優秀賞] 甲元美代子さん「幽遠」

暗さの先に光明があり、自然、光や風、空気感が作品を通して感じとれる秀作です。

[優秀賞] 丹羽善二さん「街・夕照」

遙か連なるレンガの屋根。ヨーロッパの旧き街並みと色彩配分に統一性があります。

[鉄斎美術館賞] 兒玉佐枝子さん「秋思」

身の回りの何気ない光景に目をやり、落ち着いた色調が奥深い作品に仕上げられています。

[奨励賞] 石田久江さん「陽光」

画面一杯に木蓮が開花しました。胡粉の使い方に注意です。

[奨励賞] 和田明美さん「わたしの未来」

柔らかな色彩が全体を優しく表現しています。

[佳作] 相田季久乃さん「南国の花」、金井康江さん「大野寺磨崖仏」、土井美智子さん「雄川の滝」

どれも意欲を感じとれる作品です。

■全体的な総評■

受賞作品は芸術の伝統を守りながらも、既成概念にとらわれず、自由に描写された作品が評価されました。技術の向上もさることながら、作者の意図が伝わってくる作品に好感を持ちました。僅少の差で入賞を逸した作品も多数あり、「真白き花」「緑風」「転生」は次回に期待するところです。今年度は全体的に作品が小型化しており、明年に向かって、大きめの作品に挑戦してみてください。あと一工夫加えるだけで、レベルアップします。

絵を描く原点は感動だと思っています。自分が勝手に作り上げたイメージが強すぎることもあります。写真は参考資料にとどめ、現場のスケッチを心がけてください。スケッチを基に、小下絵を作ることも忘れずに。

次回に向けて魅力ある作品の出品をお待ちしています。